

# 大村西崖著『密教発達志』訳注研究(二)

元山公寿

本研究は、大村西崖(1868～1927)によって著された『密教発達志』を書き下して、現代の研究成果を参考にしながら、詳細な脚注を加えることを目的としている。本論文は、昨年、発表した「大村西崖著『密教発達志』訳注研究(一)」の続編で、第一章の「教の興りより隋に至るまで」の第九節「三国時代に龍猛、世に出ず」(底本の十六頁)より、第十四節「呪経と陀羅尼経」(底本の四十二頁)までである。特に、この中で、大村が龍猛を密教の祖ではないと論じたことは、後に大きな論争を生んだ。その経緯については、山野(2003)に詳しく論じられている。<sup>1)</sup>以下に、訳注に当たつての凡例を記す。

## 凡例

- 一、 大村西崖著『密教発達志』(国書刊行会、1972覆刻)を底本とした。
- 二、 旧漢字は、当用漢字に改めた。
- 三、 書き下すに当たつて、可能な限り、大村の返り点にしたがい、適宜、段落分けをした。
- 四、 大村による割り注は○で示した。

- 五、 經典名や著作名には『』を、引用文には「」を附した。
- 六、 人名には、可能な限り㊦によって生没年、国王の場合は在位を補い、インド名が附されていない場合には、そのインド名を補った。
- 七、 地名に関しても、可能な限り㊦によってインド名、及び現在の地名を補った。
- 八、 年号に関しても、㊦によって西暦年を補った。

密教發達志卷一

日本 大村西崖撰

一、 教の興りより隋に至るまで

九、 三国時代に龍猛、世に出づ

三国・西晋の際に逮び、龍猛菩薩 (Nagarjuna, ca. 150 ~ 250)、南印度に出づ。その出世の年代、聚訟紛紛なりといえども、今、姑く『百論』の僧肇 (ca. 384 ~ 414) の「序」に拠らば、龍樹の弟子提婆 (Aryadeva, 3世紀頃)、仏泥洹 (nirvāṇa) の後八百年にして、世に出づ。『訶梨跋摩伝』に拠らば、跋摩 (Harivarman, ca. 250 ~ 350) の出世、仏泥洹の後九百年にあり。また、『西域記』(卷十二)を按ずるに、跋摩の師、究摩羅陀 (Kumārata, 3世紀頃)、龍樹の時を同うす。すなわち知んぬ。龍樹の出世、正に仏滅後七八百年の間にあり。故に『摩訶摩耶経』(卷下)に云く、「七百歳已りて一比丘あり。名けて龍樹と曰う」と。

また、羅什 (Kumarajīva, ca. 350 ~ 409) の『龍樹菩薩伝』に云く、「この世を去りて已来、今に至るまで、始めて百歳を過ぐ」と。これ最も信ずべし。羅什の著訳、姚秦の弘始中 (399 ~ 416) にあり。その百年前、すなわち西晋の太安・永嘉の間 (302 ~ 312) に当れり。今、龍樹の寿を以て、仮に八九十歳とせば、その生時、応に三国の初め (220 ~ ) にあるべし。仏滅より、ここに至るまで、七百余年なり。

伝に謂く、金剛薩埵一人、寿を保ち、能く密教を持して南天の鉄塔の中に閉居すの所談、荒唐なり。また弁を須たず。金剛薩埵とは、また大日と同じく、仮設の一人に属す。もし大日・金薩・龍猛・龍智・金智の血脈を以て、ただ思想の系統として、理を以てこれを言い、事を以てこれを言わずして、敢て嫡々相承、口々相伝と称すことなくんば、これすなわち可なり。苟しくも虚伝を構造して、以て後人の敬信を博さんと欲さば、遂に却て疑網を滋す。密教の為に取らざる所なり。

#### 十、龍猛、密祖にあらず

それ、釈尊、すでに密教を説かず、大日・金薩、また仮設の法人とせば、すなわち龍樹を以て、密教の開祖、両部大経の作者とせざるを得ず。謂う所の伝持の八祖に、大日・金薩を除くは、すなわちこの為なるのみ。然りといえども、熟つら龍猛の伝記を按ずるに、未だ曾て応に密教の開祖とすべき事蹟あるを見ず。『龍樹菩薩伝』に云く、「龍樹菩薩とは、南天竺に出づる梵志の種なり。天聰奇悟にして、事、再告せず。乳舗の中にありて、諸梵志の四圍陀典を誦するを聞く。各の四万偈にして、偈に三十二字あり。皆、その文を諷して、その義を領す。弱冠にして、名を馳せ、諸国を独歩す。天文・地理・凶緯・秘識、及び諸の道術、悉く綜べざることなし。」(中略)

#### ①呪術を善くす

「時に婆羅門ありて、善く呪術を知る。能うる所を以て、龍樹と勝を諍わんと欲し、天竺の国王に告ぐ。我、能くこの比丘を伏す。王よ、当にこれを験すべし。王言く。汝は大愚痴なり。この菩薩は、明、日月と光を争い、智、聖心と並び照らす。汝、何ぞ、不遜にして、敢て宗敬せざらんや。婆羅門言く、王は智人たり。何ぞ、理を以てこれを験さずして、抑挫せらるや。王、その言の至れるを見て、為に龍樹に請い、清旦に共に政聴殿上に坐す。婆羅門、後に至り、便ち殿前に於て呪して大池を作る。広長にして清浄なり。中に千葉の蓮華あり。自らその上に坐して龍樹に

誇る。汝、地にありて坐す。畜生と異なることなくして、我が清浄なる華上の大徳の智人と抗言し、論議せんと欲す。その時、龍樹、また呪術を用い、化して六牙の白象と作りて、池の水上を行き、その華座に趣き、鼻を以て絞め抜き、高く挙げて、地に擲つ。婆羅門、腰を傷め、委頓して、龍樹に帰命す」と。

『伝』にまた、龍樹の隱身の術を学び、窃に王宮に入る事を録し、『付法藏因縁伝』も略ぼ同なり。

『西域記』(巻十)に云く、「龍猛菩薩、善く薬術を閑い、餌を餐し、生を養う。寿年、数百にして、志貌、衰えず。引正王(Satavahana)、既に妙薬を得て、寿、また数百なり」と。また云く、「龍猛菩薩、神妙の薬を以て、諸大石に滴ぎ、並びに變じて金と為す」と。これらの記事、皆、ただ、その呪術を能くするを伝うるのみ。密教の開創を徴すべき所以にはあらず。

『西域求法高僧伝』(巻下)に持明蔵を叙べて云く、「龍樹菩薩、特にその要に精し」と。また、以てその誦呪を能くするを知るべきに過ぎずして、持明蔵を結集するは、却てその弟子難陀とす。

## ② 『楞伽』及び『摩耶経』の懸記

『大乘入楞伽経』は、唐の又叉難陀(Sikṣānanda, 695～699)の訳する所にして、固より龍猛滅後の述作に係る。その(巻六)謂う所の内証乗を持す懸記、何ぞ信憑するに足らんや。

『摩訶摩耶経』の懸記に至りては、龍猛の持す所、即ち密教なること明かならず。

## ③ 西蔵の伝説

西蔵の伝に龍樹の師を以て薩羅訶(Saraha)とす。また秘密経軌(Tantra)を分ちて作(Kriya)・修(Carya)・瑜伽(yoga)・無上瑜伽(yoganūttara)の四種とす。且つ謂く、その作・修の二経、金剛薩埵、これを大日より受け、龍樹に授く。龍樹、伝持すること七百年にして、諸の龍智に授く。これ喇嘛右宗の伝灯とす(河口慧海 [1866～1945]の説なり)。

④述作、未だ曾て密教を説かず

然して龍樹の述作の中に 未だ曾て密教を説くものあるを見ず。『釈摩訶衍論』は『起信論』の疏釈にして、固より密教にあらず。且つ龍樹造、姚秦の筏提摩多三藏訳と云うといえども、我が邦の淡海真人三船元開(722～785)（それ、宝龜十年(779)閏五月二十四日、戒明阿闍梨と偽妄を論する書なり。『唯識論同学鈔』の三の四に出ず<sup>(21)</sup>）、及び最澄(767～822)（『守護国界章』上に、その五失を論す<sup>(22)</sup>）以来、定論して、以て偽作とす。蓋し新羅僧月忠、これを撰すか（『教時義』<sup>(23)</sup>）。『些些疑文』の円珍(814～891)の智慧輪三藏(prajñacakra)に上る表は、忠を智に作る<sup>(24)</sup>）。

『菩提心論』もまた、龍樹造（『弁頭密二教論』上<sup>(25)</sup>）、不空(Anoghavajra, 705～774)訳と称す<sup>(26)</sup>。然るに、その釈義に諸経（『大日』、『華嚴』、『観無量寿』、『涅槃』等なり）を引く中に、善無畏(Subhakarasiṃha, 637～735)の撰す所の『大日経供養次第法』あり<sup>(27)</sup>。龍樹、豈に唐代の善無畏の言を引くことあらんや。且つ論の首の「大阿闍梨云」の五字、一本に「大広智阿闍梨云」に作る<sup>(28)</sup>。故に安然(841～?)の『教時義』(卷三)に云く、「或る目錄に云く、『菩提心論』は不空集なり」と。按ずるに、この書、すなわち不空の徒、その師説を録すのみ。苟も隻眼を具する者、誰か、これを覷破せざらん。故に円珍の曰く、『菩提心論』、或は龍樹菩薩造と云い、或は興善三藏集と云う。これ未だ決解せず。私に謂く、後の説を正とす（『些些疑文』）と。

『菩提資糧論』<sup>(31)</sup>・『大智度論』<sup>(32)</sup>に至らば、すなわち実に龍樹の造る所なり。然るに、『資糧論』、ただ応に如来の支提及び形像を敬礼して、掃地し、塗地して、香華・灯鬘・幡蓋・鼓樂を供養すべしと説く<sup>(33)</sup>。未だ密教事相の發達するものあるを見ず。

その余の龍樹の造る所に、『十二門論』(一卷。羅什訳<sup>(34)</sup>)・『中論』(四卷。同訳<sup>(35)</sup>)・『十八空論』(一卷。陳の真諦{Paramārtha, 499～569}訳<sup>(36)</sup>)・『廻諍論』(一卷。元魏の毘目智仙{Vimokṣaprajñāsi, or. Vimokṣasena?, 9世紀}・瞿曇留支{Gautama-prajñānci, 6世紀}共訳<sup>(37)</sup>)・『志輪盧迦論』(一卷。瞿曇留支訳<sup>(38)</sup>)・『般若灯論偈』(分別明{Bhāvivēka,

ca.490 ~ 570) 釈。十五卷。唐の波頗 [Prabhakararamitra, ca.565 ~ 633] 訳・『勸発諸王要偈』(一卷。宋の僧伽跋摩 [Saṅghavarman, 5世紀] 訳) 等あり。並に毫も密教を説く所なし。

### ⑤ 所謂の秘密經

『大論』(卷十)に『密述金剛力士經』を引き、如来の身・口・意の三密を説くといえども、その謂う所の秘密、すなわち随類各解の化儀の秘密なるのみ。無著 [Asaṅga, ca.395 ~ 470] の『阿毘曇雜集論』(卷六)に四種の秘密(令入。相。対治。轉變。)を説き、「方広分中に於て、一切如来のあらゆる秘密、応に随いて決了すべし」と謂う。その意もまた相同なり。もし龍猛、果して両部純密の開祖とせば、すなわち、その説く所の三密、豈にここに局らんや。また、『大論』(卷八)に云く、「仏法に二種あり。一には秘密、二には顕示なり」と。二教の名、ここより始めて出づ。然るに、この謂う所の秘密教とは、顕示教の、すなわち阿羅漢乘と為すに對して、菩薩乘を指して、これを謂う。後世の真言密教と、自から意義、異なれり。而も、その秘密教の意、契經中に散見するもの、一にして足らず。『寶積』(卷八)に云く、「菩薩密。如来秘要」<sup>(44)</sup>、「如来秘密要藏」<sup>(45)</sup>、「如来秘密の業」<sup>(46)</sup>、「如来秘密の教」<sup>(47)</sup>と。『法華』に云く、「如来一切秘要の藏」(卷六)<sup>(48)</sup>、「如来秘密神通の力」(卷五)<sup>(49)</sup>と。『方等無想經』(卷三)に云く、「如来秘密藏、甚深なること大海の如し」と。『涅槃』に云く、「如来秘藏」(北本。卷八)<sup>(51)</sup>、「大般涅槃經は悉く、これ一切秘藏なり。(中略)この故に、この經を如来秘密の藏と名く」(同上。十八)<sup>(52)</sup>と。皆これ、富永仲基 [1715 ~ 1746] の『出定後語』に謂う所の作經家の「各の自ら珍愛するの言」<sup>(53)</sup>に過ぎず。龍猛の秘密教もまた、何ぞこれを簡ぶ所あらんや。その当時、未だ密教あらざるは、瞭瞭なるのみ。

### 十一、外道の呪術、漸く仏教に入る

但し外道の呪術、ますます熾にして、その勢い、漸く將に仏教に入り来んとするものあり。『大論』(卷九)に云

く、「外道の人あり。能く藥草・呪術を以て他人の病を除く<sup>(54)</sup>」と。また(卷五十七)云く、「外道神仙の如きは、呪術力の故に、水に入りて溺れず、火に入りて熱せず、毒虫の螫さず<sup>(55)</sup>」と。また(卷五十八)云く、「諸の外道の聖人、種々の呪術ありて人民を利益す。この呪を誦するが故に、能く意の欲する所に随いて、諸の鬼神を使う。諸の仙人、この呪あるが故に大いに名声を得て、人民、帰伏す。呪術を貴ぶが故に<sup>(56)</sup>」と。また(同上)云く、「先に仙人の作す所の呪術あり。謂う所の能知他人心呪、抑叉呪と名く。能飛行變化呪、犍陀梨と名く。能住寿過千万歳呪、諸呪の中に於て、与に等しきものなし<sup>(57)</sup>」と。これ、婆羅門の呪術流行の実況なり。仏教の、その影響を蒙ること、蓋しまた、已むを得ざるものか。

顧みるに、如来の滅後、多く年所を経て、仏日、光を翳し、制戒、漸く弛む。仏徒にして、外道の呪術を讚嘆すること、上述の如し。外道、揚然として、仏徒に対して言く。「仏、もし呪術なくんば、大力ありと名けず<sup>(58)</sup>」(『大莊嚴論經』一)と。これを以て、仏徒、或は呪術を排し、或は往々に、これを行う。

馬鳴 *Maṅgalya* 1~2世紀頃の『大莊嚴論經』(卷一)に云く、「咄、悪語を出すことなかれ。仏に呪ありと謗言し、最勝尊を毀謗す。後に大苦の報を獲ん<sup>(59)</sup>」と。また(同上)云く、「如来、実に大功徳力あり。永く呪根を断つ<sup>(60)</sup>」と。これすなわち呪術を排斥するものなり。

『大論』(卷三)に云く、「出家の人あり。種々の呪術を学び、吉凶を卜筮す。是の如き等、種々の不淨活命者なり<sup>(61)</sup>」と。蓋しこの徒、少なからざるか。

また(卷二十五)云く、「菩薩、この無礙智を得て、身を転じ、生を受くる時、一切の五通仙人のあらゆる経書・呪術・智慧・技能、自然に悉く知る。謂う所の四陀尼・六齋伽 *ṣaṭāṅga* の呪術なり<sup>(62)</sup>」と。想うに、是の如きは、実に龍猛等の矜誇する所なり。

## ① 般若、明呪に比す

故に『大論』(卷五十七)に、般若を以て明呪に比し、以てその尚ぶべきを説いて云く、「何に況や般若波羅蜜をや。これ、十方諸仏の因て成就する所の呪術なり」と。また(卷三十四)に云く、「般若波羅蜜、これ大明呪なり。無上明呪なり。無等等明呪なり。(中略)過去の諸仏、この明呪に因るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得。未來世の諸仏、今現在の十方諸仏もまた、この明呪に因りて阿耨多羅三藐三菩提を得。この明呪に因るが故に、世間に便ち十善道あり」と。また(同上)云く、「諸の呪術の中、般若波羅蜜、これ大呪術なり」と。これすなわち大乘にして、呪術の功力を認るものなり。

## ② 小乗の沙門、呪術を行う

小乗の沙門もまた、呪術を行う者あり。維祇難(Vijñāna)(障礙)の師の如き、すなわちこれなり。難、印度の人なり。世に火祠に事う。曾て一沙門あり。小乗を習学し、多く道術を行う。来りて宿を難の家に請う。異道を奉るを以て、釈子を忌み、門外の露地に宿せしむ。沙門、夜に密かに呪術を加え、難の家の事うる所の火を滅せしむ。ここに於て挙家、驚畏し、共に出て沙門に請い、室に入て供養す。沙門、すなわち還りて呪術を以て火を生ず。難、すなわちその弟子となりて、仏法を奉り、諸国を遊化す。西域より江右(現在の江西省)に至る。呉の孫権(222～252)の黄武三年(224)、武昌郡(現在の湖北省武漢市)に於て経を訳す(『開元録』二・『貞元録』三)<sup>(65)</sup>。見るべし、内外の二道、大小両乗家、呪術を崇尚する者、比比として風と成る。然るに、仏徒の克く正法を持する者、すなわち外道の呪術を視て、以て、ただ不淨活命の技に過ぎずとす。矧や、それ、仏の制禁あるに於てをや。

## 十二、陀羅尼の勃興

ここを以て、龍猛の時、翅に経・律・論・雜の四蔵(『大論』十一)<sup>(66)</sup>のみありて、呪経、未だ出でず。別に陀羅尼、

すでに興ることあり。

### ① 陀羅尼と明呪の差別

陀羅尼とは、総持の義なり。外道になき所なり。外道の呪、梵言の曼怛羅 (mantra) なり。表思語を以て義とす。明、梵言の毘地耶 (vidya) なり。智を以てその義とす。その用、ならびに祝禱禁厭にあり。

### ② 陀羅尼の用

陀羅尼、固より、これに同ならず。それ、初めに必ず口誦の語言あるにあらず。ただ能く諸法の名相・義理を記持して忘失せず。一たび、これを憶起せば、すなわち説法、無礙自在なることを得。これ、名けて陀羅尼と云う。故に陀羅尼を得て、陀羅尼を行ずと謂いて、陀羅尼を誦すと言わず。蓋し心中に諸法を総持するものか。

それ『大論』は、『大品般若』を釈す。『大品』の梵本、龍猛以前に成ること、明かなり。而も『大論』、まゝ、『密迹金剛力士經』・『法華經』等を引く。二經もまた、龍猛以前に成ること、論ずることなし。

『法華』(序品)に云く、「菩薩摩訶薩八万人、皆、阿耨多羅三藐三菩提に於て退転せず。皆、陀羅尼を得て、樂説弁才にして、不退転の法輪を転ず」と。『大品』(序品)に云く、「菩薩摩訶薩、皆、陀羅尼及び諸三昧を得て、空、無相、無作を行じ已りて等忍を得て、無礙陀羅尼を得」と。

『大論』(卷五)にこれを釈して云く、「陀羅尼、秦に能持と言ひ、或いは能遮と言う。能持とは、種々の善法を集めて、能く持して、散せざらしめ、失せざらしむ。譬えば完器に水を盛るに、水漏散せざるが如し。能遮とは、悪不善根の心生ずるを、能く遮し、生ぜざらしむ。もし、悪罪を作さんと欲さば、持して作さざらしむ。これを陀羅尼と名く。この陀羅尼、或は心相応、或は心不相応、或は有漏、或は無漏、無色、不可見、無対、一時、一入、一陰攝(法持、法入、行陰)、九智知(尽智を除く)、一識識(一意識)、阿毘曇法なり。陀羅尼の義、是の如し。また次に陀羅尼を得る菩薩、

一切の聞く所の法、念力を以ての故に能く持して失せず。また次にこの陀羅尼法、常に菩薩を遂ぐこと、譬えば間日の疾病の如し。この陀羅尼、菩薩を離れざること、譬えば鬼の著くが如し。この陀羅尼、常に菩薩に随うこと、善不善の律儀の如し。また次にこの陀羅尼、菩薩を持して、二地の坑に墮さしめざること、譬えば、慈父の子を愛するが如し。子、坑に墮せんと欲すれども、持して墮さざらしむ。また次に菩薩、陀羅尼力を得るが故に、一切魔王・魔民・魔人、能く動ずることなく、能く破ることなく、能く勝つことなきこと、譬えば須弥山の如し。およそ人の口吹の動ぜしむこと能わず。」

### ③ 陀羅尼の種類

「問て曰く、この陀羅尼に幾ばく種ありや。答えて曰く、この陀羅尼、多種なり。一に聞持陀羅尼と名く。この陀羅尼を得れば、一切の語言の諸法、耳に聞く所は皆、忘失せず。また分別知陀羅尼あり。この陀羅尼を得れば、諸衆生・諸法の大小、好醜の分別、悉く知る。偈に、諸の象、馬、金、木、石、諸の衣・男女・及び水、種々に不同にして、諸物の名、一なれども、貴賤の理、殊なりと説くが如し。この総持を得て、悉く能く分別す。また、入音声陀羅尼あり。菩薩、この陀羅尼を得れば、一切の語言の音を聞きて、喜ばず、瞋らず。一切衆生、恒河沙等の劫の如く、悪言し罵詈すとも、心、憎恨せず」(中略)「また寂滅陀羅尼・無辺旋陀羅尼・隨地觀陀羅尼・威徳陀羅尼・華嚴陀羅尼・淨音陀羅尼・虚空藏陀羅尼・海蔵陀羅尼・分別諸法地陀羅尼・明諸法義陀羅尼と名くあり。是の如き等、略説して五百陀羅尼門あり。もし広説すれば、すなわち無量なり。これを以ての故に、諸菩薩、皆、陀羅尼を得と言ふ」と。

また(同上)云く、「問て曰く、前に已に諸菩薩、陀羅尼を得と説く。今、何を以てまた無礙陀羅尼を得と説くや。答えて曰く、無礙陀羅尼、最大なるが故に。一切三昧中に三昧王の三昧、最大なるが如く、人中の王の如く、諸の解脱の中に無礙解脱、大なる(仏を得て、道を得る時に得る所なり)が如し。是の如く一切の諸陀羅尼の中に無礙陀羅尼、大なり。これを以ての故に重説す。また次に、先に諸菩薩、陀羅尼を得と説く。知らず、これ何等の陀羅尼なるか。

小陀羅尼あり。転輪聖王・仙人等の得る所の聞持陀羅尼・分別衆生陀羅尼・歸命救護陀羅尼・不捨陀羅尼の如し。是の如き等の小陀羅尼、余人にもまた、これあり。無礙陀羅尼、外道・声聞・辟支佛・新学の菩薩、皆、悉く得ず。ただ無量の福德、智慧・大力の諸菩薩、独りこの陀羅尼あり。これを以ての故に別説す。また次に、この菩薩の輩、自利、已に具足す。但し彼を益せんと欲して、説法教化、尽くることなきは、無礙陀羅尼を以て根本とす。これを以ての故に、諸菩薩、常に無礙陀羅尼を行す。」と。

#### ④ 陀羅尼と大乘

すなわち知んぬ。『大品』・『大論』等に謂う所の陀羅尼は、諸法の義理を総持する所以に、これに由りて無礙辯を得て、能く法輪を転ずる心地の法門なり。三昧と及び等忍と俱に、菩薩必須の資徳、大乘不共の特色とす。後來の陀羅尼、文として誦すべきありて、外道の明呪に似たると、全く同ならず。惟だ、大乘の教門、廣大深嚴、書写至難にして、印行、未だ興らず。その耳聞心記の労苦、殆ど測るべからざるものあり。陀羅尼の起り、寔に故なきにあらず。すなわち、その重んずべき所以、またの論を須いず。

#### 十三、字陀羅尼

しかも、陀羅尼を得んと欲さば、先ず字陀羅尼に由らざるべからず。『大品』(「広乗品」)に云く、「菩薩摩訶薩の摩訶衍に謂う所の字等、語等の諸字、門に入る。阿字門、一切法、初めより不生なるが故に。(以下四十二字門を説く。今は略す)これ、陀羅尼門と名く。謂う所の阿字の義、もし菩薩摩訶薩、この諸字門の印、阿字の印を、もしは聞き、もしは受け、もしは誦し、もしは読み、もしは持し、もしは他の為に説き、是の如く知らば、当に二十の功徳を得べし。何等を二十とするや。強識念を得、慚愧を得、堅固心を得、經の旨趣を得、智慧を得、樂説無礙を得、諸余の陀羅尼門を得ること易く、無疑悔心を得、善を聞きて喜ばず、惡を聞きて怒らざることを得、高ならず、下ならず、心

に住し、増なく、減なきを得、善功に衆生の語を知ることを得、巧みに五陰・十二入・十八界・十二因縁・四縁・四諦を分別することを得、巧みに衆生の諸根の利鈍を分別することを得、巧みに他心を知ることを得、巧みに日月・歳節を分別することを得、巧みに天耳通を分別することを得、巧みに宿命通を分別することを得、巧みに生死通を分別することを得、能く巧みに是処・非処を説くことを得、巧みに往来・坐起等の身の威儀を知ることを得。(中略) この、陀羅尼門・字門・阿字門<sup>(6)</sup>。これ、菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く<sup>(7)</sup>。」と。

『放光般若』、『大品』の異本とす。その「陀隣尼品」に云く、「摩訶衍あり。謂う所の陀隣尼目法 (dharanīmukha)、これなり。何等を陀隣尼目法とするや。字と等しく、言と等しく、字の所入の門なり。(亦た四十二字門を説く。今、これを略す) この字教の所入、皆、これ陀隣尼の所入の門なり。もし菩薩摩訶薩、この字の事を曉了する者あらば、言數に住さずして、便ち言數の慧を曉知す。もし菩薩摩訶薩、この四十二字の所入の句印を聞く者、持し、諷誦する者、もしはまた、他人の為にその義を解説し、妄見を以てせず、持し、諷誦する者あらば、當に二十の功德を得べし。」(粗ぼ『大品』に同じ)と。

『大論』(卷四十八)に、これを釈して云く、「字等・語等とは、この陀羅尼、諸字に於て平等にして、愛憎あることなし。(中略)等とは、畢竟空涅槃と同等なり。菩薩、この陀羅尼を以て、一切諸法に於て通達無礙なり。これ、字等・語等と名く。(中略)この字等の陀羅尼、名けて諸陀羅尼門とす。(中略)諸陀羅尼法、皆、分別字語より生ず。四十二字、これ一切字の根本なり。字に因りて語あり。語に因りて名あり。名に因りて義あり。菩薩、もし字を聞かば、字に因り、乃至、能くその義を了す。この字の初めは阿、後は荼なり。中に四十ありて、この字陀羅尼を得。」と。

また云く、「菩薩、この陀羅尼を得て、常に諸字相を觀し、修習し、憶念するが故に、強識念を得。」と。

また云く、「菩薩、この陀羅尼に因りて、諸字を分別し、破散するに、言語もまた空なり。言語、空なるが故に、名もまた空なり。名、空なるが故に、義もまた空なり。畢竟空を得るは、すなわちこれ、般若波羅蜜の智慧なり。」と。また云く、「陀羅尼を得とは、譬えば、竹を破すが如く、初節、既に破すれば、余は皆、易し。菩薩もまた是の如く、

この文字陀羅尼を得れば、諸陀羅尼、自然にして得。」<sup>(83)</sup>と。  
上來、引援する所、以て字陀羅尼の体用の一斑を察知するに足るか。

### ① 字印の排列

且く一例を挙げて、これを説かば、字陀羅尼とは、語首の一字を採り、その語義を以て、その字義とす。譬えば、阿字を以て、阿提 (adī、初)・阿耨波陀 (anurpāda、不生) の義ありとし、羅字を以て、羅闍 (ra、<sup>(84)</sup>塵垢) の義ありとし、波字を以て、波羅木陀 (pamāra、<sup>(85)</sup>第一義) の義ありとするが如し。四十二字、皆、此の如し。これ字印と名く。これを排列し、以て、諸法の名義を摂持し、能く縦横に旋転し、無礙自在なることを得。

### ② 口誦陀羅尼

また、口に、以て誦持して、記憶に便なることを得。ここに於てか、陀羅尼に、始めて、諷誦すべきものあり。『法華』(「普賢品」<sup>(86)</sup>) に謂う所の百千万億旋陀羅尼 [koṭi-sata-sahasavarta nama dharanī] の如きは、すなわちこれなり。

### ③ 陀羅尼と偈頌

顧みるに、仏教、憶持に便なりて、得道に益することあらんと欲して、偈頌の製あり。字陀羅尼、すなわち更に偈頌を洗練して、その精髓を存するものに似たり。偈頌、ただ諷誦に宜しきを以て旨とす。陀羅尼、含蓄の多きを以て、要とす。故に、その一字・一句・一章に詮する所の法義の富贍、深広にして、能く無量の法門を総持す。もし敷衍して、これを説かば、すなわち、その一章・一句・一字、能く無量の法門を釋出するに足る。卷舒、手にあり、放斂、意に随う。これを開きて、法界を覆い、これを縮めて、一字に入る。これを以て、能く無礙辯を得て、以て法輪を転ず。その功用の大なること、偈頌の比すべきにあらざるは、宜なるかな。字陀羅尼、一たび興らば、忽ち大乘教中に行わる。前

に説く所の心地修得陀羅尼、また、皆、各の口誦語言あるに至りては、並びに『大集經』に説く所の如し。(後出)

#### ④ 陀羅尼と明呪との混同

ここに於て、陀羅尼と明呪との差別、漸く明かならず。共に呼声の名句を臚列し、起結の語言もまた粗ぼ相同す。況や、その用、正法を知解し、記持するを止めざるをや。滅罪・除障・伏魔・護法の功德ありとするに至りては、『法華經』(「陀羅尼品」・「普賢品」)中の藥王・勇施の二菩薩、及び多聞・持国・鬼子母の説く所の諸陀羅尼の如き、すなわちこれなり。此の如く、陀羅尼と明呪と相い粉淆して、殆ど弁別すべからざるに至り、遂に両者に通ず。或いは共に呪と称し、或いは熟呼して、陀羅尼呪と曰う。馬鳴の『大宗地玄文本論』(卷八)に謂う所の「摩訶衍大陀羅尼金剛神呪修多羅」の如き、以て、その一例とすべし。

#### 十四、呪經と陀羅尼經

爾來、方等部中に、陀羅尼經の頻出することあるを見る。東晋(280～320)以後、呪經、尋いで、また興る。但し、呪經、元より外道の呪術を摸仿するより出づ。陀羅尼經、すなわち大乘得道の意を本とす。故を以て、明呪と陀羅尼と異なる所、前者は多く神名を呼び、後者は多く法語を用う。幾ばくか差別に没するに似るといへども、しかも呪經と陀羅尼經と、唐代に迄び、なお自ら弁別すべき所のものあるを存するか。

#### ① 陀羅尼經

すなわち、『持句』・『華積』・『無量門』・『八吉祥』・『決定總持』・『玄師颯陀』・『檀特』・『摩尼羅賈』・『善方便』・『弥勒』・『虚空蔵』・『無崖際』・『羅摩伽』・『大方等』・『楞伽』・『舍利弗』・『文殊問』・『普賢』・『法炬』・『威徳』等、皆これ陀羅尼經なり。唐の玄奘訳の『六門』・『藥師』・『諸仏心』・『拔苦』・『普密』・『臂幢』等の經もまた然なり。爾後

続出して、以て趙宋（960～1279）の新訳に至る。中に就くに、『大集経』を以て、その尤なりとす。

## ② 出世間の願と世間の願

経旨、並びに皆、除障・滅罪・擁護・得道にあり。願意、出世間を専らにす。得福・治病等の如き、世間の雑小なる諸願、すなわち敢えて求むる所にあらず。供養・観想・印契・曼荼羅等の密教の事相に至りては、すなわち、この部に於て、遂に発達する所あらずして、止む。但し、この種の陀羅尼経の中に、外道の呪法の意を帯ぶるは、往々にしてあり。『大陀羅尼神呪』・『金光明』・『雜集』等の経、すなわちこれなるのみ。

## ③ 呪経

中に就くに、『金光明経』の如きは、これを訳する者、数人あり。その年代の遞え降るに随い、呪法を混ざること漸く多くして、顕教の陀羅尼門と、その由来する所を異にし、全く、世間の樂欲する諸願の成就を以て、志とし、専ら、持誦の作法を説くこと、外道の如くなれば、すなわち呪経の類なり。それ、これに属するは、東晋にあらば、『孔雀』・『呪時氣』・『呪齒』・『呪目』・『呪小兒』・『請観音』・『六字』等の経なり。元魏（386～534）にあらば、『護諸童子』・『古義経』なり。梁（502～557）にあらば、『摩利支天』・『牟梨曼荼羅経』なり。北周（557～581）にあらば、『請雨』・『十一面経』なり。隋（581～619）にあらば、『不空罽索経』なり。唐（618～907）に至らば、すなわち智通（7世紀）の『千手』・『千転』・『随心』・『清浄観音経』、伽梵達摩（Bhagavadharma, 7世紀）の『千手経』、玄奘（602～664）の『十一面』・『不空罽索経』なり。以て、阿地瞿多（Atikita, 7世紀）訳の『陀羅尼集経』、及び菩提流志（Bodhiruci, 572～727）訳の諸経に至り、後に遂に両部の大経あり。

## ④呪経、発達し、密教と成る

密教の発達大成、主に、これ等の諸経にあり。蓋し、それ、世間の諸願成就に効あることありとして、俗を入れ易きもの、最も流行発達するを致すのみ。然るに『般若』に説く所の字印は、後に一転して、諸尊の種字となり、再び転じて法曼荼羅となる。而も、その字義解釈、すなわち旧によりて、以て教理を莊嚴す。

## ⑤所願、また得道に帰す

所願向上の極に至りて、旋りてまた、顕教大乘の陀羅尼門、ただ得道を求むるの旨に帰し、速疾成仏を以て、最大事とす。竟に以て、「両部灌頂の儀式を成就す。爾後、宋代（960～1127）新訳の経軌、なお、続出し、更に變じて喇嘛教となる。

## ⑥雑部と純密

この系統、全く先の陀羅尼門に異りて、その瞿多・流志訳の諸経を見るに、大抵、皆、釈尊所説と称す。雜うるに顕教の意を以てするが故に、これを雑部密経と謂う。すなわち、密教の漸成の半程とするのみ。両部の大経に至らば、すなわち毘盧の所説と称す。専ら事密を弘むるが故に、これを純密と謂う。これ、すなわち密教の大成なり。学者、もし、これ等の消息を詳かにせんと欲さば、すなわち、須く陀羅尼経と呪経とを対照して、並びに深くこれを研鑽せざるべからず。

## ⑦安然の卓見

故に安然、その『八家秘録』に序して曰く、「窃かに諸阿闍梨の目録を検ずるに、並びに『貞元録』の中に於て、その新人の経法を抽きて、以て真言一家の教門とす。諸の旧訳の中の陀羅尼法、皆、これを取らず。遂に学者をして、

所由を了せざらしめ、博覽を欠かさしむ<sup>(註)</sup>』と。真に肯綮に中ると謂うべし。

## 註

- (1) 山野智恵「仏教学における近代化の問題——龍猛伝をめぐる——」(『現代密教』, vol.16, 智山伝法院, 2003)
- (2) 『百論序』(T. vol.30, p.167c) 取意。
- (3) 『出三藏記集』卷十一「訶梨跋摩伝」(T. vol.55, p.78c) 取意。
- (4) 『大唐西域記』卷十一(T. vol.51, p.942a)。
- (5) 『究摩羅陀』は『出三藏記集』(T. vol.55, p.78c) の表記に従っている。『西域記』では、訳の「童受」と表記されている。
- (6) 『摩訶摩耶経』卷下(T. vol.12, p.1013c)
- (7) 『龍樹菩薩伝』(T. vol.50, p.185b, 186b)
- (8) 『龍樹菩薩伝』(T. vol.50, p.184a, 185b)
- (9) 『龍樹菩薩伝』(T. vol.50, pp.184c ~ 185a, 186b)
- (10) 『龍樹菩薩伝』(T. vol.50, p.184a ~ b, 185b ~ c)
- (11) 『付法藏因縁伝』(T. vol.50, pp.317b ~ 318c)
- (12) 『大唐西域記』(T. vol.51, p.929b)
- (13) 『大唐西域記』(T. vol.51, p.930a)
- (14) 『大唐西域求僧高僧伝』(T. vol.51, p.6c)
- (15) 『大唐西域求僧高僧伝』(T. vol.51, p.7a)「ここに於て難陀法師、呪明の散失するを恐れ、遂に便ち撮集すること、十二千頌ばかりなり。一家の言と成る」

- (16) 『大乘入楞伽經』(T. vol.116, p.627c)「自内所証の乘、計度の所行にあらず。願くは仏滅度の後、誰か能くこれを受持するか説きたまえ。大慧よ、汝、応に知るべし。善逝の涅槃の後、未來世に、當に我が法を持す者あるべし。南天竺三國中に、大名徳の比丘あり。それ、号して龍樹とす。」
- (17) 『摩訶摩耶經』(T. vol.12, p.1013c)「七百歳已りて一比丘あり。名けて龍樹と曰う。善く法要を説き邪見の幢を滅して正法の炬を然す」
- (18) 河口慧海『印度密教時代区画の研究』(『密教研究』vol.2, 密教研究会, 1919, p.156) 参照
- (19) 『大乘起信論』(T. vol.32, No.1666)
- (20) 『釈摩訶衍論』(T. vol.32, p.592b)
- (21) 『唯識論同学鈔』(大日仏, vol.76, pp.357～358)「古人淡海居士、戒明闍梨に送る消息」
- (22) 『守護国界章』(T. vol.74, p.162b, 『伝教大師全集』, vol.2, p.278)「翻訳、分明ならざるが故に。隋唐の諸目錄、見録に載せざるが故に。その真言の字、梵字に相似せざるが故に。その義理、本論に相違するが故に。姚興は、秦にあり。真諦は梁にあり。秦代の筏提の訳、已に梁家の論に同じ。もし正義の論ならば、秦より以降、唐の開元に至るまで目錄に載せず、疏師、引かざる、これを以て帰信するに足らず」
- (23) 『真言宗教時義』(T. vol.75, p.375b)「また南大寺の新羅僧珍聡の伝に云く、この論、新羅国の大空山沙門月忠の撰なりと」
- (24) 『些些疑文』「智慧輪三蔵に上る書」(『智証大師全集』下, p.1338b)『摩訶衍論』十卷、或が云く、新羅僧月智(また知と云う)の撰なり。』(『日蔵』にはこの文なし、vol.80, pp.97～132)
- (25) 『弁頭密二教論』上(T. vol.77, p.378b, 『弘大全』, vol.1, p.491)「この論は龍樹大聖所造の千部の論の中の密蔵肝心の論なり」
- (26) 『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』(T. vol.32, p.572b)

- (27) 『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』(T. vol.32, pp.574a～b)「毘盧遮那経疏の釈に准ずれば」  
 (28) 『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』(T. vol.32, p.572b)、『大正蔵』では、「大広智阿闍梨云」となっており、  
 注で、仁和寺蔵本などに「広智」が欠けていることを示す。
- (29) 『真言宗教時義』(T. vol.75, p.427c)  
 (30) 『些此疑文』(『智証大師全集』下, p.1038a)、『日蔵』, vol.80, p.98a)  
 (31) 『菩提資糧論』(T. vol.32, No.1660)  
 (32) 『大智度論』(T. vol.25, No.1509)  
 (33) 『菩提資糧論』(T. vol.32, p.540c) 趣意。  
 (34) 『十一門論』(T. vol.30, No.1568)  
 (35) 『中論』(T. vol.30, No.1564)  
 (36) 『十八空論』(T. vol.31, No.1616)  
 (37) 『廻諍論』(T. vol.32, No.1631)  
 (38) 『壹輪盧迦論』(T. vol.30, No.1573)  
 (39) 『般若灯論釈』(T. vol.30, No.1566)  
 (40) 『勸発諸王要偈』(T. vol.32, No.1673)  
 (41) 『大智度論』(T. vol.25, p.127c)「密迹金剛経の中に説くが如し。仏に三密あり。身密、語密、意密なり。」  
 (42) 『阿毘達磨雜集論』は、安慧の著作とされており、無著のものとはされていない。無著は『大乘阿毘達磨集論』  
 を著したとされており、この引用も、この『大乘阿毘達磨集論』に見出される(T. vol.31, p.688a)。  
 (43) 『大智度論』(T. vol.25, p.84c)、『大正蔵』では「顯示」を「現示」としており、注で「顯示」もあることを示  
 している。

- (44) 『大宝積經』「密迹金剛力士会」(T. vol.11, p.43b)  
(45) 『大宝積經』「密迹金剛力士会」(T. vol.11, p.43b)  
(46) 『大宝積經』「密迹金剛力士会」(T. vol.11, p.43b)  
(47) 『大宝積經』「大乘十法会」(T. vol.11, p.151a)‘これだけ巻八には見あたらず、巻二十八にある。  
『妙法蓮華經』(T. vol.9, p.52a)  
(48) 『妙法蓮華經』(T. vol.9, p.42b)  
(49) 『大方等無想經』(T. vol.12, p.1092b)  
(50) 『大般涅槃經』(T. vol.12, p.409a)  
(51) 『大般涅槃經』(T. vol.12, p.472b)‘ただし『大正蔵』では、「大般涅槃經は悉く、これ一切諸仏の秘蔵なり」となっている。  
(52) 富永仲基『出定後語』(『日本思想体系』, vol.43, 岩波書店, 1973, p.81)  
(53) 『大智度論』(T. vol.25, p.122b)‘『大蔵經』では「外道の仙人」となっている。  
(54) 『大智度論』(T. vol.25, p.464b)  
(55) 『大智度論』(T. vol.25, p.469b)  
(56) 『大智度論』(T. vol.25, p.469b)  
(57) 『大智度論』(T. vol.25, p.469b)  
(58) 『大莊嚴論經』(T. vol.4, p.258a)  
(59) 『大莊嚴論經』(T. vol.4, p.258a)  
(60) 『大莊嚴論經』(T. vol.4, p.258a)  
(61) 『大智度論』(T. vol.25, p.79c)  
(62) 『大智度論』(T. vol.25, p.247a)

- (63) 『大智度論』(T. vol.25, p.464b)
- (64) 『大智度論』(T. vol.25, p.468b)
- (65) 『大智度論』(T. vol.25, p.469b)
- (66) 『開元釈教録』(T. vol.55, p.487b～c) 趣意
- (67) 『貞元新定釈教目錄』(T. vol.55, pp.784c～785a) 趣意
- (68) 『大智度論』(T. vol.25, p.143c) 「四種の法藏を以て人に教う。一に修妬路藏、二に毘尼藏、三に阿毘曇藏、四に雜藏なり。」
- (69) 『妙法蓮華經』(T. vol.9, p.2a)
- (70) 『摩訶般若波羅蜜經』(T. vol.8, p.217a)
- (71) 『大智度論』(T. vol.25, pp.95c～96a)
- (72) 『大智度論』(T. vol.25, p.96a)
- (73) 『大智度論』(T. vol.25, p.96b)
- (74) 『大智度論』(T. vol.25, p.97c) 『大藏經』では、「歸命救護陀羅尼・不捨陀羅尼」が「歸命救護不捨陀羅尼」となっている。
- (75) 『大藏經』では、ここに「何等を字等、語等の諸字、門に入るとするや」の文が入っている。
- (76) 『大藏經』では、「阿字門等」となっている。
- (77) 『摩訶般若波羅蜜經』(T. vol.8, p.256a～b)
- (78) 『放光般若經』(T. vol.8, p.26b～c)
- (79) 『大藏經』の本文では、この部分は問いの部分で、「今、何を以て、この字等の陀羅尼を説きて、名けて諸陀羅尼門とするや」となっている。

- (80) 『大智度論』 (T. vol.25, p.408b)  
(81) 『大智度論』 (T. vol.25, p.409a)  
(82) 『大智度論』 (T. vol.25, p.409b)  
(83) 『大智度論』 (T. vol.25, p.409b)  
(84) rajās  
(85) paramārtha  
(86) 『妙法蓮華經』 (T. vol.9, p.62a)  
(87) 『妙法蓮華經』 「陀羅尼品」では藥王菩薩・勇施菩薩、毘沙門天、持国天、羅刹女がそれぞれ陀羅尼を説き (T. vol.9, pp.58b ~ 59b) ‘ 普賢菩薩勸発品」では普賢菩薩が百千万億旋陀羅尼を説く (T. vol.9, p.61b)  
(88) 『大宗地玄文本論』 (T. vol.32, p.682b)  
(89) 『仏説持句神呪經』 (T. vol.21, No.1351)  
(90) 『仏説華積陀羅尼神呪經』 (T. vol.21, No.1356)  
(91) 『尊勝菩薩所問一切諸法人無量門陀羅尼經』 (T. vol.21, No.1343)  
(92) 『仏説八吉祥神呪經』 (T. vol.14, No.427)  
(93) 『仏説決定総持經』 (T. vol.17, No.811)  
(94) 『仏説玄師颺陀所説神呪經』 (T. vol.21, No.1378)  
(95) 『仏説檀特羅麻油述經』 (T. vol.21, No.1391)  
(96) 『仏説摩尼羅亶經』 (T. vol.21, No.1393)  
(97) 『仏説善法方便陀羅尼經』 (T. vol.20, 1137)  
(98) 『弥勒菩薩所問本願經』 (T. vol.12, No.349)

- (99) 『虚空藏菩薩問七仏陀羅尼呪經』 (T. vol.21, No.1333)  
 (100) 『仏説無崖際総持法門經』 (T. vol.21, No.1342)  
 (101) 『仏説羅摩伽經』 (T. vol.10, No.294)  
 (102) 『大方等陀羅尼經』 (T. vol.21, No.1339)  
 (103) 『楞伽阿跋多羅宝經』 (T. vol.16, No.670)  
 (104) 『舍利弗陀羅尼經』 (T. vol.19, No.1016)  
 (105) 『文殊師利問經』 (T. vol.14, No.468)  
 (106) 『仏説大普賢陀羅尼經』 (T. vol.21, No.1367)  
 (107) 『大法炬陀羅尼經』 (T. vol.21, No.1340)  
 (108) 『大威徳陀羅尼經』 (T. vol.21, No.1341)  
 (109) 『六門陀羅尼經』 (T. vol.21, No.1360)  
 (110) 『仏説薬師瑠璃光如来本願功德經』 (T. vol.14, No.450)  
 (111) 『諸仏心陀羅尼經』 (T. vol.19, No.918)  
 (112) 『拔濟苦難陀羅尼經』 (T. vol.21, No.1395)  
 (113) 『八名普密陀羅尼經』 (T. vol.21, No.1365)  
 (114) 『勝幢臂印陀羅尼經』 (T. vol.21, No.1363)  
 (115) 『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪經』 (T. vol.21, No.1332)  
 (116) 『金光明經』 (T. vol.16, No.663)  
 (117) 『陀羅尼雜集』 (T. vol.21, No.1336)  
 (118) 『孔雀王呪經』 (T. vol.19, No.988)

- (119) 『仏説呪時氣病経』 (T. vol.21, No.1326)  
(120) 『仏説呪齒経』 (T. vol.21, No.1327)  
(121) 『仏説呪目経』 (T. vol.21, No.1328)  
(122) 『仏説呪小兒経』 (T. vol.21, No.1329)  
(123) 『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経』 (T. vol.20, No.1043)  
(124) 『仏説六字呪王経』 (T. vol.20, No.1044)  
(125) 『仏説護諸童子陀羅尼経』 (T. vol.19, No.1028)  
(126) 『大吉義神呪経』 (T. vol.21, No.1335)  
(127) 『仏説摩利支天陀羅尼呪経』 (T. vol.21, No.1256)  
(128) 『牟梨曼陀羅呪経』 (T. vol.19, No.1007)  
(129) 『大方等大雲経請雨品第六十四』 (T. vol.19, No.992)、『大雲経請雨品第六十四』 (T. vol.19, No.993)  
(130) 『仏説十一面観世音神呪経』 (T. vol.20, No.1070)  
(131) 『不空罽索呪経』 (T. vol.20, No.1093)  
(132) 『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』 (T. vol.20, No.1057)  
(133) 『千転陀羅尼観世音菩薩呪』 (T. vol.20, No.1035)  
(134) 『観世音菩薩随心呪経』 (T. vol.20, No.1103)  
(135) 『清浄観世音普賢陀羅尼経』 (T. vol.20, No.1038)  
(136) 『千手千眼観世音菩薩广大圓滿無礙大悲心陀羅尼経』 (T. vol.20, No.1060)  
(137) 『十一面神呪心経』 (T. vol.20, No.1071)  
(138) 『不空罽索神呪心経』 (T. vol.20, No.1094)

『陀羅尼集経』(T. vol.18, No.901)

(140)(139) 『諸阿闍梨真言密教部類総録』(T. vol.55, p.1113c)

なお、本研究は、平成十九年度より、大学院のゼミで本書を講読してきたノートをもとに、筆者が大幅に改訂を加えたものである。そのため、特に出典に関する脚注に関しては、ゼミに参加した大学院の諸氏の力に負うところが多い。